

『護る』というコト。

シャルル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼い頃の約束…それが少女の生きる意味だった。その約束が果たされたとき、少女はどのような選択をするのか？

目次

#	#
2	1
4	1

1

「♪〜☒」

綺麗に整頓された部屋に置かれた、一台のピアノ。真つ白な鍵盤の上を滑らかに動く綺麗な指。ピアノから奏でられる旋律は月の光のように静かに消えていくけれど、それすら意識できないほどボクの目はピアノを弾き続ける人物へと向いていた。その間も、演奏は続いていく。

ベルガマスク組曲 第三曲 『月の光』というこの曲は、ほとんどがピアノニツシモで構成された夜想曲。優しく切ない印象を持たせる曲として有名で、音楽の教科書なんかも載つてたりする。その印象を見事に再現しながら演奏する目の前の人物：『白金燐子』はボク『白金凜音』の姉で、ボクは『燐ねえ』って呼んでいる。

やがて演奏が終わりに近づき、ピアノを弾く手が止まった。そのタイミングで拍手をしながら、ボクは燐ねえに声を掛ける。

「どう？ 今回の調律はボク一人でやってみただけど…」

「うん…すごくいいよ、凜音」

「やった！よかったあ…」

今日は初めて一人でピアノの調律をしたのだが…上手くできていたみたいだ。ほつと息を吐くと、ピアノを弾いていた燐ねえが椅子から立ち上がり、静かに鍵盤の蓋を閉めた。

「それじゃあ、ご飯食べる…?」

「そろそろ七時だし、そうしよつか」

時計を見れば既に夜の七時を回っていた。二人揃ってピアノの置いてある部屋…燐ねえの部屋から出て、リビングへ続く階段を下りていく。夕食はボクが調律をしている間に燐ねえが作ってくれたらしい。両親は今日帰ってこないと連絡が来ているので、ねえと二人で夕食を取るようになる。

「そういえば、最近バンドはどうなの?」

「うん…練習は大変だけど、凄く…楽しいよ」

「そっか、ならよかったね!」

燐ねえは最近話題のアマチュアガールズバンド『Roselia』のキーボードを担当している。始めにバンドをやると聞いた時は凄く驚いたけれど、昔から引つ込み思案だった燐ねえが勇気を出したんだなと思うと嬉しく思えた。

(まあ、ボクの役目も終わったって意味でもあるんだけど…)

幼いころに約束した事を、憐ねえは覚えていてくれるだろうか。——いや、きつと覚えていないだろう。何せ10年以上も前だ、覚えていられるわけがない。

(『憐ねえの事はボクが護つて見せる』、かあ…)

この約束は今までの『白金 凜音』を形作る芯のようなモノだ。もしこの芯が消えたとき、ボクはどうすればいいのだろうか。

「凜音、聞いている…？」

「えっ!? な、なに…？」

「明日、お休みだし…どこか、出かけないかなって…」

「あ、明日? 特に予定は無いけど…」

「ふふ…なら、決定だね?」

嬉しそうに笑う憐ねえを見て、少しだけ心が軽くなる。

(…少なくとも、今考えることじゃないか)

「そうだね、久しぶりに二人で出かけるの嬉しいな!」

——今はまだ、その時じゃない。そう考えて、ボクは早くも待ち遠しくなった明日へと思いを馳せた。

カーテンの隙間から差し込む光が廊下を照らす。起床する時間にもかかわらずまだ寝ている凜音を起こしに行くことにした私は、そつと凜音の部屋のドアをノックする。

「凜音…起きてる…?」

「…」

返事が無い。なら部屋に入っても…いいよね?

そう思った私は静かにドアノブを回しドアを開けていく。忍び足で中に入ると、部屋の奥に据え置かれたベッドの上でこちらに背を向けて寝ている凜音が見えた。

「凜音…起きて」

お寝坊さんな妹を起こそうと肩を優しく揺すると、凜音は何か寝言を言いながら寝返りを打ってこちらを向いた。

「燐、ねえ…」

「…ふふっ…」

寝言の中に自分の名前が入っていたことに驚きながらも、凜音のあどけない寝顔に思

わず微笑んでしまう。昔から引つ込み思案な私を気にかけて、時に支えてくれていた凜音。同じクラスの友人は少し大人びた印象を持つ人も多いらしいし、私自身考え方が大人びていると思っている。それでも、こう寝顔を見ていると年相応の可愛さが…なんて思ってしまう私はおかしいのだろうか。

凜音の頭をそつと撫でる。静寂の中、愛おしい妹の寝顔を見ながら私は穏やかな時を過ごすのだった。

「んう…」

微睡みから醒める。ぼやけた視界に最初に入ってきたのは艶やかな黒髪と、私の頭を撫でる雪のように真っ白な手。

「…あ、起きた？」

「燐ねえ……おはよう……」

……あれ？何で燐ねえがボクの部屋にいるのかな？

「今……何時？」

「10時半、だよ……？」

……ああ、なるほど。完全に寝坊したやつか。やつちやつたなと思いつつ上がるうとすると、燐ねえに押さえつけられた。

「……いや、燐ねえ？」

「別にまだ……寝てもいいんだよ？」

「いや、起きる時間とつくに過ぎて——」

「だって、最近凜音頑張ってたし……疲れてるでしょ？」

……言われてみれば、ここ最近ずっと忙しかった気がする。昨日は休憩無しでギターのメンテナンス、燐ねえのピアノの調律をやったし、一昨日はバイトで半日外だったな……。

「少しぐらい……休んだっていいんだよ？」

そう言つて、ボクの頭を太股の上に乗せた燐ねえは静かに微笑んだ。てか膝枕……意識してないのかな？

「り、燐ねえ……膝枕してるけど……」

「別に午後からでもいいから……少し、のんびりしよう？」

「憐ねえ…」

頭を撫でられている内にまた瞼が重くなってきた、疲れが溜まってたんだなあと思いつつ、静かに目を閉じる。

(もう少しだけ…いつか)

久しぶりの穏やかな時間を過ごしながら、ボクの意識は闇へと落ちていった。